慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	帰有光の系譜
Sub Title	The You-guang tradition
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.58- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

帰有光の系譜

佐藤一郎

一

帰有光（1506～1571）は、字を熙甫といゝ、号の震川で知られる明の代表的古文作家である。しかしながら彼の六十六年の生涯は、古文辞派の盟主である李攀竜（1514～1570）の華やかな文壇生活とほとんど重なっており、その文壇における地位はかなり孤立したものであったと考えられる。たしかに王慎中・唐順之らと共に嘉靖の三家と称せられはしたが、その在世時代は王・唐二氏より一段低く見られていた気配がある。たとえば李攀竜も「送王元美序」のなかで展開する文章論で、王慎中、唐順之の名前を敵手として挙げているが、帰有光の名前は挙げていない。もし見落しがなければ滄溟先生集三十一巻を通じて、一度も帰有光には触れていないのである。また帰有光は八股の名手として高名であったにもかかわらず、進士になったのは実に六十才になってからであり、文壇的にも社会的にも決して恵まれていたとはいえないのである。また家庭的にもつぎつぎと妻子に先だたれ、恵まれているとは、いいきれなかった。

では、このほとんど故郷の崑山と隣の嘉定を離れなかった帰有光の文章は、全国的には知られなかったかといえば、そうでもない。

とくにその晩年においては、ある地方ではかなり高名であったと思われる証拠がある。帰有光自身「己未会試雑記」（嘉靖三十八年・五十四才）のなかで記録しているが、「予、石仏閘より鉛山の費楙文と歩行して済州城外に至り、泉州の挙子数人と遇う。共に市肆の中に憩う。数人の者、問いて予の姓名を知り、皆悚然として環揖して言えらく、『吾等少より公の文を誦し、以て異世の人と為せり。意わざりき、今日見えるを得んとは。』……」という有様だったのである。

想うに福建省泉州の地は、嘉靖の三家の一人である王慎中の出身地晋江の隣県であり、儒教の反逆者李贄（字は卓吾1527～1602）も晋江の出身である。この地には反古文辞の勢力が滲透していたに違いない。生前にもその文章は写本で、唐宋派の拠点では知られていたのではないかと考えられる。あるいは、その余技である八股文の選集で、その名を知っていたのであろうか。これより後、福建は建寧の令、王子敬（崑山出身）の手で刊行された文集が、帰震川文集としては最も早い。帰有光と福建との因縁は、まことに浅からざるものがあるのである。

また、銭謙益（1582～1664）は「列朝詩集」の「震川先生小伝」で、次のエピソードを記録する。「嘉靖の末、山陰（すなわち紹興）の諸状元、大綬、官翰の学、置酒して郷人・徐謂文長の入れるを招く。夜良久しうして乃ち至れり。学士問いて曰く、『何ぞ遅き也。』文長曰く、『頃らく雨を士人の家に避け、壁間帰有光の文を懸くるを見る。今の欧陽子也。廻翔雒誦して、舎て去る能わず。是を以て遅れる耳』と。学士、隷に命じて其の軸を巻きて以て来らしめ、燈を張して快かに読みぬ。相対して嘆賞し、旦に達するに至れり。」

この山陰こそは帰有光が青年時代に入るまで、この地で講学生活を続けた王守仁（号は陽明・1472～1528）の本拠地であり、公安派や李贄の文学的主張にも共通する気風が流れていたに違いない。既成の権威となっていた古文辞派に対して、文学的にも独自の判断を示したからといっても不思議ではないのである。また、彼の文章が壁間に掲げられるという形で、江南地方に伝播している点にも注目したい。そして感嘆去る能わざる思いをした人物は、当時の一流文人の徐謂（字は文長・1521～93）であり、かれも反古文辞の線に連なるが、ディレッタントの色彩きわめて濃厚な才子であった。

かくて一部に根強い支持者を持つに至った帰有光の学問を慕う者は、「四方より来り学ぶ者、常に数十百人。海内、震川先生と称びて、名氏を以てせず。」（銭謙益「震川先生小伝」）という情況を呈するのである。王錫爵の「明太僕寺寺丞帰公墓誌銘」でも「常に数

十百人」となっており、その人数がたいへん多かったことは異論がないにしても、では、ほんとうに四方から来り学んだかという点になると、その範囲は意外に狭かったように思われる。

錢謙益はまた「嘉定四君集序」（「初学集」巻三十二）において、「熙甫既に没するも、その高第の弟子、多くは嘉定に在りて、猶お能く其の師説を守り、荒江寂寞の浜に講誦するがごとし。」といっているし、帰有光の曽孫であり錢謙益の弟子にあたる帰莊（1613～1673）は、「簡堂集序」において、「先太僕府君は故、安亭に居れり。安亭は崑山と嘉定の界たるも、嘉定を去ること近しと為す。当時、経を執り字を問う者、嘉定に尤も多し。其の後、府君の文章、崑山に遂に伝うるなし。」という。数百人の弟子が集まったにしても、その地域は嘉定・崑山を中心とするものであり、とくに嘉定の学統が明末まで持続していたことは注目にあたいする。帰有光が第二位の成績で挙人の試験に合格したのは三十五才嘉靖一九年のことであるが、三十七才には故郷の崑山から嘉定の安亭に引越しをしている。以来、嘉定がその教育活動の中心地になったのである。

青木正児博士の「清代文学評論史」には、錢謙益が「嘉定の人李流芳と共に科挙に応じた際、流芳から唐宋八大家の文に就いて説を聞き、感服して心が動いた。其後数年にして嘉定の老先生等から帰有光の遺説を聞いた。」とあるが、この李流芳がとりもなおさず嘉定の四君の一人である。錢謙益の「嘉定四君集序」では唐叔達、婁子柔、程孟陽、李長蘅の四人を挙げている。劉声木の「桐城文学淵源考」では、「李流芳、字は茂宰、一字は長蘅、嘉定の人、明の万歴丙午の挙人」とあり、帰有光の学統に数えている。

さて青木正児博士はまた、錢謙益が南京の郷試に応じた際に、この李流芳から帰有光の文説を聞いたのであろうと推論されている。錢謙益が帰有光について知ったのは、この時が最初であるとの博士の推論は、錢謙益の他の文章によっても、その正しさが証明される。すなわち錢謙益にはまた帰有光の孫であり帰莊の父である昌世、字は文休にあてた「帰文休七十序」があり、そのなかで、「余、嘉定の李長蘅（流芳）と游ぶ。因て以て長蘅の友、新安の程孟陽、崑山の帰文休と交わる。」と述べている。してみれば、帰家との交際がはじまるより早く、李流芳と知りあったことになる。また李流芳と帰昌世とは王志堅と共に三才子と称せられ、若年の頃から交友関係があったと思われる。（趙経達「帰玄恭先生年譜」に引く「蘇州府志」による）

青木博士の指摘から、次の事実が自然と明瞭になってくる。帰有光の学説・文説が講じられていた嘉定から、いくらも離れていない

常熟出身の銭謙益が、南京において嘉定の人を通じて帰有光を知ったという事実は、南京が江南地方の新知識の交換場所であるのを示すと共に、他方では帰有光の業績が忘れられかけてきたことを物語っている。まず南京が詩文の歴史でどのような役割を果したかについて二、三の例を挙げるならば、侯方域（1618～54）がはじめて唐宋派に接したのもこの地であって、順治の初年には故郷の河南省商邱で、帰有光の文を郷人に鼓吹している。桐城派の古文の開祖である方苞の父方舟が、康熙の初年に銭澄之・社濬・杜芥と交際したのもこの地である。桐城の人、方以智がしきりに南京に往来したのはそれよりやゝ早く、崇禎の末のことであった。

われわれはここで、銭謙益によって顕彰されるまでの帰有光の系譜と、評価そして影響範囲について、簡単に振り返えっておく必要があるようである。

二

帰有光の文学を要約すれば、第一に形式よりも内容を重視し、道の形れ（あらわ）としての文章を主張する。第二に、文章の規範も秦漢だけでなく唐宋、ことに宋人の文章を尊重する。古文辞派と比べると、たしかに学問的な根柢がある。第三に、以上の要素と結びついて、現実直視の傾向を深めているが、その直視はおもに自分の家族と地域社会に向けられる。その観察と凝視は、家庭尊重と弱き者への同情という愛の精神で裏打ちされている。第四に派手な誇張された表現よりも、質実で地味な表現を採る。淡々としたなかに流れる真摯な敍述と細やかな描写には、見るべきものがある。第五に、その地方性のなかから、新しい文章の分野を生みだしていること。これはまた、江南地方の市民社会の成熟をも同時に意味しようが、呉の地方でとくに盛んであった寿序を、文学にまで高めている。第六に、その文学は、ある種の狭さと潔癖さの上に成り立っている。帰有光の詩はあまりに文章と比べて少なすぎるし、また当時の詩文家には古文辞派たると唐宋派たるとを問わず、戯曲や小説に対して同情と理解を持っている人が多かったが、かれにはその気配がない。わずかに「張孺人墓誌銘」で張氏が子供のために小説を語り聞かせたことを、そのまま批判を加えずに記録している程度のものである。

さて、以上のような特徴をもつ帰有光の文学および学問は、どのようにして伝えられたであろうか。まず、その子孫の仕事からいえば、万暦丙子の武科の挙人子寧および子祐の手で「震川文集」初刻本三十二巻が刊行され、一族の道伝の手で旧本集と呼ばれる二十巻

本が刊行されている。もう一本、復古堂本があるが、上・下巻の二巻にすぎない。そのほか、帰有光の子供のうちで、もっとも文名の高かった万暦辛卯の挙人子慕、字は季思は、「文も亦、具うるに家法あり」と劉声木の「桐城文学淵源考」に見え、沈徳潜の「明詩別裁」にも九首が採られているほどである。

どうやら帰震川集は、その曾孫にあたる荘、字は元恭の出現にいたるまで、主として子孫の手で刊行されて来た傾向がある。このことは、その著書の伝播の範囲と性格を、おのずから語るものであろう。帰荘については、また章を改めて説くつもりであるが、帰有光没してより七十数年後の崇禎帝の悲劇的な死に至る文壇の変遷と、そのなかにおける帰有光評価の変遷について語りたいとおもう。

周知のように、古文辞派の総師である李攀竜が隆慶四年（1570）に世を去ると、その在世中からこれと並ぶ実力を持ちながら、先輩の李攀竜を立ててきた王世貞（1526～1590）が文壇の中心的存在となる。「その生地である江蘇の太倉は、元末明初以来、南方市民文学の中心でありつづけた蘇州の、隣県である。近い過去の大家は、沈周であり、文徴明である。そのグループには、祝允明、唐寅のように、奇矯の人物もいた。しかし伝統の大体は、都会的に優雅であり、北方のあらあらしい空気が生んだ古文辞に懐疑的であった。前七子の一人として、徐禎卿を出し、蘇州の名家皇甫汸兄弟が、そのいとこ黄省曾とともに、李夢陽の信奉者であったけれども、伝統を全面的に変えることはなかった。青年のころの王世貞は、文徴明の知遇をも、うけている。」

これは吉川幸次郎博士の「元明詩概説」よりする、王世貞の故郷の状況の引用であるが、さらに「彼の一人舞台」のありさまを、次のように活写する。「彼は時代第一の巨人であり、偉人であった。時代全体が、彼の名声の前にひれふした。蘇州その他、今までは古文辞に懐疑的であった南方の諸地帯も、もはや例外でなかった。非職の大官として、郷里太倉にいとなんだ豪奢な庭園を、はじめは小祇林、のちには弇山園と名づけたのに、毎日おびただしい訪問客が、道士、僧侶、遊び人をも含んで、つめかけ、文士たちのうち、追随を表明するものは、ひきたてられ、反抗するものは、にらまれた。古い同志の李攀竜、徐中行、梁有誉、呉国倫、宗臣を、前五子とし、後五子、広五子、続五子、末五子など、追随者の等級をきめた。」

この巨人の帰有光評価が、その晩年には支持する方向に変ってきたのである。「帰太僕贊幷序」で王世貞は、「先生の古文詞に於ける、之れ史・漢より出ると雖も、而も大較昌黎・廬陵を折衷す。其の得意の所に当りては、沛如たり。雕飾を事とせずして、而も自か

ら風味あり。超然たるも当に名家たるべし矣。其の晩く達して終に意を得ざるは、尤も識者の惜む所と為るとしか云う。」と、述べるに至るのである。

これはいったい何を意味しているのだろうか？　李攀竜の死後、王世貞は李攀竜との友情を確めあう関係から自由になり、（「滄溟先生集」には、王世貞の名前が、無数に出てくる。しかし「与呉明卿書」以外は王世貞をすべてよくいっている。）雄渾ではあるが無理をしているところのある復古的な文学から、現実直視の傾向を強めてきたのである。この現実直視は、明末清初の時代全般の傾向であり、清朝の威信が確立してからは、そのうちの政治批判の側面は薄れるが、論理的な要素が発展してくるのである。

王世貞の帰有光評価は一方、南方市民文学の伝統への接近を意味する。李攀竜からの拘束がゆるめば、地方の文化的雰囲気への親近感が強まるのは、極めて自然な成行きであろう。またさらに考えるならば、崑山出身の帰有光にかれが同情を持ってもおかしくない、もう一つの地縁がある。もともと王家の祖は、元の時代に崑山に住んでいたのだった。李攀竜は世貞の父忬の伝、「総督蘇遼右都御史兼兵部左侍郎王公伝」を書いていう。「元に至りて夢声、崑山の学正と為る。因って家せり焉」と。太倉に移るまでは、崑山に家があったのである。震川文集を手にしたからといって、これは決して古文辞派に対する裏切りとはいゝきれないかもしれない。だが、少なくとも、古文辞派自体の、なんらかの変質を意味するものである。

この王世貞の死より天啓二年（1621）まで三十一年間あるが、銭謙益が帰有光を再発見したのは、天啓年間の筈であるから、この時期の帰有光観が問題になってくる。文壇の状況は、すでに古文辞派には統率者を欠いてひと頃の面影はなく、反擬古の文学の諸潮流が万暦のなかば以降を色どるのである。

すなわち公安（湖北省）では袁宏道（字は中郎1568～1610）をはじめ、兄の宗道、弟の中道が、独創性に富む自由な表現を主張し、現実をよりよく反映する新鮮な作風を示した。そして宏道が知事をしていた呉県（江蘇省蘇州府）を中心に、この人々の多くに、影響を与えたことが知られている。この公安三袁と親交のあった唐宋派の詩文家に湯顕祖（1550～1617）があるが、戯曲「還魂記」の作者として、今日では一層名高い。この三袁や湯顕祖の同時代人に、中国最大の異端である李贄があり、王学左派の立場から宋学の礼教的規範に反抗し、童心を説いて止まなかった。かれらの思想には、いずれも李贄の影響が見られ、戯曲・小説に対する高い評価もこれ

と無関係ではなかった。この前後、三十年ばかりの間こそ、伝統的権威との闘いにおいて、もっとも大きな成果をあげた時期といわなければならない。

では、かれらは帰有光をどう見ているか。帰有光より、はるかに拘束の少ない、文学世界に身を置く袁宏道は、「敘姜陸二公同適稿」において古文辞派を退けたのちに、まず唐順之からはじめ、「一時の文人、之を望みて其の崖際を見ざる者、武進の唐荊川是れ也。」といゝ、ついで、「文詞は甚だしくは奥古ならずと雖も、自ら戸牖を闢き、亦能く言わんと欲する所の者を言うは、崑山の帰震川是れ也。」と述べ、さらに唐寅、祝允明、文徵明等の名をあげて、呉中の文運の隆昌をたたえるのである。

一方、湯顯祖は、「王季重小題文字序」の冒頭においていう。「時の文字、能く筆墨の外、言わんと欲する所を言う者、三人而已。帰太僕の長句、諸君變の緒言、胡天一の奇想。各々其の病あるも、天下、敢て望む莫し焉。」ちなみに徐朔方の箋註によれば、王思任、号は季重がこの文を得たのは、万暦三十八・九年の間であると推定している。

ここではまだ帰有光の名は、とくべつの権威を以ては意識されていない。まだ、かなり並列的であり、諸家の文集中にその名前を見ることもまれである。ただし、帰有光の仕事は、この時期に至って忘れさられたのではなく、かなりの尊敬の念を以て迎えられていたことは確かだといえよう。

三

では、帰有光の直接の師弟集団は、どのような形で続いていたか？「桐城文学淵源考」の巻一、「此の巻専ら、帰有光に師事及び私淑するの諸人を記す」の諸小伝を按んずるに、従游の弟子常に数百人のうち、高第の弟子と目されるのは、次の四人である。

唐欽堯、字は道虔といゝ、撫州巡導を勤めた。嘉定の人。

張応武、字は茂仁、崑山の人。

邱集、字は子成、嘉定の人。

李汝節、字は道亨、嘉定の人。嘉靖乙丑の進士。すなわち、進士となったのは、帰有光と同年である。

その外の人々では、「震川年譜」によれば、崑山の王執礼、字は子敬が同じく進士となっている。震川文集中に、もっとも多く名前の出てくる一人であるが、「桐城文学淵源考」ではかれを採らない。時に、有光が友人扱いをしていたりするためであろうか？　この王氏は帰荘の「書先太僕全集後」において、「始め府君の門人王子敬、閩の建寧の令たり。閩中に刻するも、文既に多からず、流伝も亦少なし。」といわれている人物である。この王執礼と共に、文集中にその名がもっとも多く出てくるのは、沈孝、字は敬甫である。師弟継承をたどってみると、崑山に伝わった帰有光の学統は、しばしばこの王執礼にたどりつく。崑山の人、顧懋宏とか周詩字は以言などは、王執礼に師事している。この王執礼系と、張応武と帰家が、崑山の学統の中心であったとおもわれる。

一方、嘉定に伝わった学統はどうか。先にあげた高弟四人のうち、三人まで嘉定の人であるが、唐欽堯がもっとも先輩で、邱集・李汝節はそれよりやゝ後輩であったとおもわれる。そして、崑山の人張応武は、以上の三人よりやゝ若かったと推定される。なぜなら、「年未だ壮ならざるに、即ち諸生を棄てて帰有光に師事し」とあり、また嘉定四先生のうちの二人である「婁堅・唐時升の輩と古を論じ学を講じ」（「桐城文学淵源考」所引の嘉定県志）ているからである。この唐時升、字は叔達は先に挙げた最先輩の欽堯の子であるからには、張応武よりさらに若くても不思議はない。婁堅は直接、帰有光に師事したことが知られている。嘉定の四先生のうち、残る二人が、直接帰有光に教えを受けたかどうかは明かでない。しかしながら、直弟子である婁堅は健在であり、父子二代にわたる弟子の唐時升もその仲間である。すなわち、「唐時升・婁堅・李流芳・程嘉燧は偏く交わる。嘉定の名宿、有光の緒論を熟聞し、服し習いて之を討論せり。其の師承の議論は、経を以て経緯とし、史を根抵と為す。文を以て従とし、字順を体要と為せり。造車合轍、固く相与に之を共にす。」（前掲書所引、嘉定県志、檀園詩集）と。

ここ、嘉定においては、帰有光教団は万暦なかば以降も健在だったのである。李流芳が、万暦丙午の歳、すなわち三十四年の挙人であることを想起していただきたい。この土地では、伝統文学の歴史のなかでは、もっとも激しく動いた時期にもかかわらず、地味で真面目な、経史の基礎のある文章の道を、わき目もふらず伝え続けていたのである。

四

万暦は四十七年の長期にわたるが、泰昌の一年を挾んで、世は天啓・崇禎年間へと移る。この明末の二十数年と清初の順治年間にかけて、文壇の中心的地位を占めたのは、銭謙益であった。天啓二年（1621）には四十才に達し、東林党の指導者としての声望も重みを加え、江南の天地を圧していたように思われる。この銭謙益が順治十七年（1660）に震川集の序文を書き、往時を回顧してこういっている。「余、少壮のころ俗学に汨没するも、中年にして嘉定の二、三の宿儒に従いて遊び、先生の議論を郵伝し、幡然として轍を易え、稍〻方に向うを知りぬ。先生は実に其の前路を導く。啓・禎の交、海内先生を望祀すること、五緯の天に在るが如し。芒寒うして色正すの、其の端も亦、余より之を発せり。」と。中年以降の銭謙益に及ぼした、帰有光の位置の重要性を知るべきである。

また、張伝元・余梅元の著した「帰震川年譜」の附録に、「計孝廉東撰順徳府建帰震川先生祠堂碑記」が収められているが、崑山の帰有光と王世貞を同郷扱いしているのである。すなわち、「且つ是の時に当り、同里の王元美、浙東の王伯安、或いは文章を以て、或いは理学を以て、天下に号召し、俊雄魁傑の士、靡然として風に従う。」と述べている。そして著者は同里に註して、「明の時、崑山・常熟・嘉定の三県の地を割きて、太倉州を置き、蘇州に属せり。故に同里と名ずく。一府に隷属するに因れり。」としている。これを「明史」蘇州府の項で確かめてみると、太倉は衛城を中心に崑山・常熟・嘉定の三県の地から割いた部分を増加して成立しているのであって、崑山・常熟・嘉定が太倉に含まれているとの意味ではない。余梅元の註にはやゝ曖昧な点があるが、いずれにせよ隣県で、同里の感情すら持っていた点は変りがないのである。趙泉澄著す「清代地理沿革表」にも清初の行政区劃として、「蘇州府――順治初年には州一：太倉を、県七：呉・長洲・崑山・常熟・呉江・嘉定・崇明を領せり。」とある。してみればすくなくとも、明末から清初にかけて、銭謙益の故郷である常熟と、帰有光の故郷である崑山およびその第二の故郷である嘉定とは、府の単位では同一の行政単位に属し、時には同里の名称でさえ呼ばれている程の地縁がある。自分の学問および文学の双方に共通するものを見出して以来、これを崇め顕彰する志を立てたとしても不思議ではない。銭謙益は、天啓・崇禎の交より天下に帰有光を敬仰する風が起ったのは、自分の功績であるといゝきっているのである。

これは康熙三年に書かれた帰荘の「侯研徳文集序」でも認めているところで、「嘉定の文派は、故太僕を宗とす。而して虞山銭宗伯は、太僕の功臣也。」といっているが、康熙六年執筆の「書先太僕全集後」では、なぜか順治十七年に、正集三十巻別集十巻を刊行した際の、銭謙益の功績については、ほとんど触れていない。銭謙益の「新刻震川先生文集序」を見れば、これはまた四部叢刊本の序と同文であるが、かれが順治十七年本で果した役割は明かである。

もっとも、帰荘がその刊行の中心となり、荘の死の直後の康熙十四年に出た震川文集でも、巻頭には「曽孫荘較勘・虞山後学銭謙益選定・玄孫玠編輯」とあり、全く無視したわけではないが、かれ自身が刊行に当ってもっとも力があったことを、とくに強調する意図があったのではなかろうか？　震川集の文字を私意を以て改めたと帰荘を非難した、同じく帰有光を尊崇する汪琬との論争も、正系争いの側面があってこそ、いっそう激しさを加えたのではなかろうか？　銭謙益が康熙三年に世を去ってから、荘の心には有光の正系を以て任ずる気持が強まったのではないかとおもわれる。

これはやゝ別の話になるが、康熙十四年刊の系統は、最もひろく流布した刊本であるが、後刷本には「新刊震川先生集序」の全文を収めながら筆者の名を削り、巻末の震川先生小伝さえも見□□詩集□□□撰となっている。列朝の書名と銭謙益の名を消してあるのである。おそらく乾隆帝が弐臣の文学者として、はげしく非難して以降の刊本であろう。事実乾隆四十七年（1782）に刊行された「四庫全書総目提要」巻百七十二に収める「震川文集」三十巻別集十巻・通行本の解題では、まったく銭謙益の名前は見当らずに、「是の編は、其の曽孫荘の訂する所たり。」とあるだけである。

さて、本筋に戻ると、銭謙益は、「新刻震川先生文集序」より十七年前の崇禎十六年にも「題帰太僕文集」を書き、そのなかで、「余と熙甫の孫の昌世と、互に相い捜訪し、其の遺文若干篇を得たり。槧本に較べ、十の五多くして、誤れる者は芟去せり焉。是に於いて熙甫一家の文章粲然たり。」と述べている。これがのちに「新刻震川先生文集序」で往に余、震川先生の文を好み、先生の孫昌世と、遺集を訪求し、参読して是を正し、始めて編を成す有り。」とその冒頭で回顧する事実である。崇禎十六年には昌世の子、荘は三十一歳、帰有光の古机を見つけて「太僕府君読書几志」を書き、大喜びをしている最中だった。ただし、この際も帰家では、帰有光顕彰のために、たいへんな努力を払ったことだけは事実である。ところが康熙十四年の刊本の諸系統は、閩本からはじまり崑山本も常熟本も

内容が多くなく、また錯誤も崑山本・常熟本あたりでは少くなかったようである。故に康熙六年に書かれた帰荘の「書先太僕全集後」（刊行に先だって書かれた跋文）においても、「未だ世皆尊仰するを知りて、而も文の反って流伝せざること府君の如き者あらざる也。亡友南昌の王于一、嘗て荘に語って曰く、君が家の太僕の文を観んと欲して、遍く求むるも得る可らずと。前年黄州の顧赤方も亦言えらく、楚中の士大夫、多く震川先生の名を知るも、其の文集を見るに繇るなし。江楚、呉中を去ること、僅かに二千余里、已にして流伝して彼に至る能わず。則ち遠き者知る可し矣。」と慨嘆しているのである。おなじ崑山の出身で帰荘とは無二の親友である顧炎武は、全国を周遊したことでも有名であるが、「与湯聖弘」で「而して北方は蔵書甚だ少なく購書良や難し」とか「答汪苕文書」で「兼ぬるに北方は書籍を購むるの難きを以てす。」と述べている有様であるから、江南地方の、それも蘇州府を中心とした一帯や、南京あたりでしか刊本を入手するのは困難だったのではなかろうか。もちろん江西省あたりでも蔵書家艾南英の家には、当然震川文集があったとおもわれるが、これは例外であろう。いずれにせよ、当時すでにその流伝も少なく、善本を求めても復元が因難な状況にあったことは確かである。また降って乾隆年間に至っても、銭謙益・帰荘の結集した震川文集の通行本を「四庫全書」に採っているぐらいであるから、通行本以上の善本の発見が国家権力の背景を以てしても不可能だったと見ることができるのである。

五

帰荘は帰有光を信奉し、晩年にはその著書をひろめるのに以上のように貢献しているのにもかかわらず、帰有光の学統を祖述したのではなくて、かなりその性格を変えている点が見られる。それ故に『桐城文学淵源考』の著者劉声木も、かれをその系譜からはずしたのであろうが、明滅亡の悲劇を挾んで、帰荘自身の主観的願望にもかかわらず、変質を遂げている面がある。かれは帰有光の孫の昌世、字は文休を父にもち、また銭謙益に有光あるを教えた李流芳とその父帰昌世とは、親しい友人関係である。銭謙益はまた帰荘の師に当るのであるから、もし祖述する意図があるならば、これ以上めぐまれた環境はない。ところが、かれが心をひかれたのは司馬法であり、かれが出入した文学結社は復社（文章道では他流の復社へ、なぜ入ったかの点では問題が残る。）であり、その無二の親友は顧炎武であったのであって、その詩文集には全般に経世致用の傾向が強く表れている。おなじく銭謙益の弟子筋に当る黄宗羲にも同様の

傾向が見られるように、時代に敏感であった青年層全般に共通する雰囲気であった。そこで帰荘と顧炎武の文風はかなり近いのであるが、この二人の文風の違いは、帰有光およびその系譜をどう受け止めているかの違いに、つながってくる点がある。ところで同郷の先輩であり、親友の先祖であり、その家学である帰有光について、顧炎武は当然触れてもいいと思われるのに、今までに知り得たところでは、わずかに「哭帰高士」のなかで「太僕経は鏗鏗たり、三呉学者と推す」と、帰荘の死に関連してその祖先をたたえているくらいのものである。康熙十四年本の助刻者すなわち資金援助者の連名にも、顧炎武の名前はない。その伯父、徐乾学の名前はここにもあり、序文さえ寄せているが、さまざまな理由で伯父を以て代表させているのだろうか？　それとも、資力がなかったのか？　最後に考えられることは、それほど帰有光を尊重していなかったという三点である。吉川博士は慶応義塾大学における第十六回日本中国学会の折に、顧炎武は銭謙益に反対であったから、その好むものには反対の態度を示したのであると、この疑問に答えられた。この事実と、王陽明の思想系統につながるからとはいえ黄宗羲の『明儒学案』の視野にも入っていないことを考え合せる時、康熙初年においては帰有光を学者としては、すでに評価しなくなっていたのではないかと考えられる。とくに清朝の学問主流の祖となった人々の間に、その傾向が見られることに注目したい。

残されたのは詩文家、とくに文章家としての名声であるが、帰有光の系譜につながる人々は、それだからといって文章家としての面だけを意識したのではなく、より強く儒者としての面を意識したのである。その系譜を考える時に、また狭く限定しようとする意識の流れがあり、これが道徳的にはリゴイズムの傾向、文学的には俗文学否定、文章専家（この点では顧炎武も「日知録」で、詩は必ずしも誰しも作らなくてもよいといっているが）の決意に通ずるようにおもわれる。

おなじ唐宋派でも、湯顕祖・侯方域・銭謙益等には、これよりも自由で余裕のあるディレッタント的要素といかにも明人らしい主情的な要素が強いが、帰荘からさらに方苞の線をたどる時に、いったんは帰荘において、帰有光の現実直現の傾向が時事に深入りし、経世致用の方向をたどりそうになる桐城古文の源流も、現実直視の方向を論理的なものの考え方、表現の仕方に限定してここに焦点を合せてくるようにおもわれる。これは或いは清朝考証学と共通する時代全般の雰囲気であるかもしれない。

帰荘がほかの唐宋派の人々以上に、方苞に近い点で、ひとつ気附いたことは、銭謙益のように俗文学に対して寛大な同情者を側に持

ちながら、小説戯曲に対して厳しいことである。「邪鬼を誅す」の一文で金聖嘆を攻撃したあげく、水滸伝・西廂記の内容が社会道徳的に見て危険だといっている。もっともそのかれにも、時事を読みこんだ憂国の散曲「擊筑余言」の作があるが、これは国士の態度で貫ぬかれていて、余裕の産物ではない。

六

さて、以上曲りなりにも方苞以前における帰有光系の跡をたどったのであるが、方苞の古文、すなわち桐城派古文の成立期に、どの傾向が強められ、また切捨てられたか？　ここでは問題をつぎの二点に搾って考えてみよう。

まず第一に、帰有光からなにを継承したか？　第二に、同じく桐城の古文家、戴名世をどう意識し、それがかれにどう響いているか？　どのようにして官許の古文となったか？　まず方苞自身が帰有光をどう評価しているだろうか？　一番まとまったところでは「帰震川文集の後に書す」であるが、それ以外では「孫以寧に与うるの書」「楊千木文稿序」「劉大山に与うるの書」において、少し触れている程度である。これ等を通じて見てゆくと、明代古文の代表として帰有光を身近に意識していたことはよく分る。ただしこれは、直接師事すべき目標ではなく、比較的近くにあってその欠点もよく見え、乗超えることが可能な具体的な目標として意識されたようである。すなわち「帰震川文集の後に書す」では、「震川の文、郷曲に応酬する者十に六、七、而して又請者の意に徇う。常を襲い瑣を綴る。大いに俗言に遠らんと欲すと雖も、其の道由る無し。」といゝ、「震川の文、所謂序有る者に於いては、蓋し庶幾矣。而して物有る者は、則ち寡し焉。又其の辞は雅潔と号するも、仍お俚に近くして繁に傷む者あり。豈に時文に於て既に其の心力を竭し、故に両つながら精なる能わ不る與。抑々学ぶ所、主として文を為るに専らに、故に其の文も亦、是に至りて而止まるか与。」と批判しているのである。なぜ「其の辞は雅潔と号するも、仍お俚に近くして、繁に傷む者あり」となったかといえば、それは時文に精力を注ぎ、学問の根柢が浅く、内容に乏しくなったというのである。時文に深入りせず、学問的にも一代の師表を以て任じていた方苞にとって、帰有光の文章は全面的には承服しがたいものがあった。ではなにが継承されたかといえば、「帰震川文集の後に書す」にあるように、「其の気韻は蓋し之を子長に得たり。故に能く法を欧・曾に取りて、少しく其の形貌を更える耳。」すなわち司馬遷・欧陽修・曾鞏

とつづく修飾の少ない地味で質実な文体を意識しているのであって、これはあえて系列を考えた場合に明代古文の代表者として帰有光が頭に浮ぶのであって、常日頃は「史記」「左伝」に直接学ぼうという意欲の方が、はるかに強いことを意味する。むしろ帰有光への傾倒ぶりは、戴名世の方が強い。「帰震川文集の後に書す」で戴名世はいっている。「最後に帰震川の書を得て、心に愜う有り。余、之を好む。或いは余に問える有り。震川の佳拠は何に在りかと。余、心口の間、疑議すること良や久しうするも、竟に其の然るを言う能わず。嗚呼、比れ震川の震川為る所以にして、余之を知ること独り深しと為す也歟。」ただ、戴名世の場合、まだ主情的な要素が強く、（方苞より十五も歳上であるから、明風に近い点があるのだろう）明確に、理論的に整理はしていないのである。一方、帰有光の到達点のうち日常の瑣事をリアルに描与する力量は、方苞にはむしろ欠点として映るわけであるが、この系列の写実の系譜は後世どこに引継がれているか考えてみると、一部はやゝ変形して沈復の「浮生六記」あたりの文章に現れ、さらには小品文の文章にもその影響の余波は及んでいるようにおもわれる。他の一部は、当の方苞の「獄中雑記」「弟椒塗墓誌銘」などの描与にその展開の跡が見出せる。

第二の戴名世との関係であるが、まずその文章から見てゆくと、戴名世の文章は基本的には志士的な、悲憤慷慨の気分の強い、やゝ発散性の性格を備えており、方苞の文章は凝縮の方向を目指し、深く沈潜していて、写実性の勝ったものである。戴名世にも記録性の強い文章があるが、どうしても歌いあげようとする調子を抑えきれない。もし代表的な文字の獄である南山集事件が起らなかったとしても、方苞の側により多く時代精神に適応するものがある限り、やはり清朝古文の中心になったのではないかとおもわれる。方苞が帰有光をひたすら讃美するのではなく、批判的に継承しているように、かれには体系への意欲が強く見られる。帰有光の系譜をたどる時に、道の文学における清朝風の確立者、方苞にどうしても到達するのである。すなわち、道の貫徹の思想の面では、唐宋以降の古文家に限っていえば韓愈から学んでいるが、文の表現の面では曾鞏の質実で誇張のない論理的な筆の運び、敍述の文では欧陽修、近くは帰有光に学んでいるようである。文の内容と表現における厳格主義がかれの特色であるが、かれの心の底には清朝人のさびしい気分があり、ものを見詰め抜いた末にたどりつく、やゝ窮屈な写実の文章が成立したのではなかろうか。このある種の狭さと潔癖さこそ、方苞がどう帰有光を評価しようと、あきらかに帰有光自身の風格ではなかろうか。わたくしには、しきりにそう思われてならない。

（一九六五、二、三初稿・六・一六補筆）